

## 国際連携による地場産業を活かしたシームレスなデザイン教育プログラムの 開発研究

### DEVELOPMENT OF SEAMLESS DESIGN EDUCATION SYSTEM IN COLLABORATION WITH THE LOCAL INDUSTRY THROUGH GLOBAL COOPERATION

小北 光浩 元・芸術工学部ファッションデザイン学科 助教

野口 正孝 芸術工学部ファッションデザイン学科 教授

金沢 香恵 芸術工学部ファッションデザイン学科 助教

Mitsuhiro KOKITA Department of Fashion and Textile design, School of Art and Design, Former Assistant Professor

Masataka NOGUCHI Department of Fashion and Textile design, School of Art and Design, Professor

Kae KANAZAWA Department of Fashion and Textile design, School of Art and Design, Assistant Professor

#### 要旨

本研究は、異なるデザイン分野であるテキスタイルとファッションの教育をシームレスな人材育成教育プログラムとして構築することを目的とする。

産学連携による人材育成で実績を上げている Institut français de la mode (IFM) での研修及びノッティンガムトレント大学との国際連携により新たな人材育成教育プログラム構築と地場産業の再構築を目指す。国際連携により教育機関が国内産地と一体となり、ラグジュアリーブランドに向け、これまでにない高品質で高付加価値のテキスタイルを作りえる人材育成を目的とし、テキスタイルからファッションに至るシームレスな人材育成教育プログラムの開発を行うものである。

目的である、テキスタイルからファッションに至るシームレスな人材育成教育プログラムの開発、市場が求める商品の提案ができる人材の育成及び産地の持つ高い技術を生かした高品質で高付加価値なテキスタイル開発を踏まえ、ラグジュアリーブランドに向けてのテキスタイル提案を目標に、テキスタイル開発と教育プログラムの運用を行った。

#### Summary

The aim of this project is development of a seamless educational program as university, which educate to range from textile design to fashion design. However the aim is not only the development of education program but also a step of reconstruction of the local industry.

Through global cooperation with IFM and Nottingham Trent University, Kobe Design University and Nishiwaki, which is the local textile industry near by Kobe Design University, worked together for making high quality and high value added textiles. The target of textiles was European luxury brands.

Through these workings, we developed both education and design system for cultivation of human resources who can propose new products in luxury fashion industry with high understanding of characteristics of the local industry.

## 1. 目的

本研究は、異なるデザイン分野であるテキスタイルとファッションの教育をシームレスな人材育成教育プログラムとして構築することを目的とする。海外の価格競争の中で衰退している国内地方の主要な地場産業であるテキスタイル産地は、受託加工型の産地から高付加価値の商品を企画・発信する産地に生まれ変わらなければ衰退の一途を辿るのみである。各産地は高度な技術は持っているが、市場が求める商品を提案できる人材に乏しい。それは人材育成機関がテキスタイルは「工芸」、ファッションは「家政」の領域によって教育が行われていることに原因の一つがある。そこで、産学連携による人材育成で実績を上げている *Institut Français de la Mode (IFM)*での研修及びノッティンガムトレント大学との国際連携により新たな人材育成教育プログラム構築と地場産業の再構築を目指す。国際連携により教育機関が国内産地と一体となり、ラグジュアリーブランドに向け、これまでにない高品質で高付加価値のテキスタイルを作りえる人材育成を目的とし、テキスタイルからファッションに至るシームレスな人材育成教育プログラムの開発を行うものである。この人材育成教育プログラムは、本研究において地場産業である「播州織」の活性化を図ることと共に、より実践的な教育を求めるファッション産業に向けて、高等教育機関としての本学科の教育価値を高めることを目的として行う。

## 2. 研究の概要

2014年度行ったノッティンガムトレント大学及び「播州織」産地の産元商社である株式会社丸萬との共同研究の継続発展として行った。2014年度は、生地サンプル制作から衣服の商品サンプル制作まで行い展示会に出したが、テキスタイル開発に焦点を絞ったほうが、地場産業の活性化とその取り組みの中での実践的教育方

法の開発という目的に合致しているため、2015年度は複数回のテキスタイル開発を行った。目的である、テキスタイルからファッションに至るシームレスな人材育成教育プログラムの開発、市場が求める商品の提案ができる人材の育成及び産地の持つ高い技術を生かした高品質で高付加価値なテキスタイル開発を踏まえ、ラグジュアリーブランドに向けてのテキスタイル提案を目標に、下記の内容とスケジュールでのテキスタイル開発と教育プログラムの運用を行った。

## 3. スケジュール

2015年7～9月：IFMでの研修、リサーチを踏まえた研究方向性決定とトライアルのための試作方針決定

2015年10～11月：ノッティンガムトレント大学訪問、トライアル試作の制作と生地展での評価リサーチ、他産地リサーチ

2015年12月～2016年2月：トライアルを踏まえた二次試作の制作

2016年2月～3月：二次試作を踏まえ、教育プログラムおよび生地差別化戦略の検証

## 4. IFMとラグジュアリービジネス

2014年度の研究を通して、産地の高い技術を生かした生地は高コストであるので、求める市場としては欧州のラグジュアリーブランド向けを主とするべきであると結論づけた。2015年度の研究では、パリにある、ラグジュアリービジネスの研究でも世界的に有名な、ファッションに特化した大学院大学IFMでのサマーコースにて講義を受け、また、IFMの教授陣数名の方から、個別にヒアリングをさせていただき、ラグジュアリービジネスの概要及び本質について学び、研究の方向性への示唆を得た。

ラグジュアリービジネスの本質とは、高価な商品の提供ではなく、他では得られない独自の経験を顧客に提供することであり、ラグジュア

リー市場において必要となる独自性を生み出す仕組みとして、自由な発想を持つ学生のアイデアを取り入れたデザイン提案の方法、トレンドを通じたマーケット理解とデザインへの展開方法及びデザイン面と技術面の役割分担と教育としての進め方を、実際の生地づくりを通して研究することを決めた。2014年度より引き続き共同で研究を行う丸萬、上田氏は多くの国内デザイナーズブランドよりその技術力と対応力を認められており、その技術力に付加価値をつけることができるデザイン力育成の教育方法開発が研究のポイントとなった。

##### 5. ノッティンガムトレント大学

IFMでの研修で得た研究目標を踏まえ、2014年度より引き続き共同研究を行うノッティンガムトレント大学を訪問し、共同研究の詳細について打ち合わせを行う予定であったが、担当者である Amanda Briggs-Goode 氏が秋まで病気療養のため不在となり、実際に訪問できたのは10月末となった(図1)。すでに海外の新学期も始まっているタイミングであり、また、2015年度の研究も進行していたこともあり、共同での生地の開発ではなく、2014年度を踏まえた今後の教育方法の研究についての検証を行った。

学期の不一致や距離の問題もあり、共同開発より、共通テーマによるお互いの研究成果発表を共同で行い検証していくほうが有益であるという結論になり、手始めに、2014年度結果をインディゴ展というテキスタイルの国際見本市の同大学ブースに展示することになった。今後は、継続的に研究成果発表をノッティンガム、神戸で行うことを取り決めた。また、より緊密な連携を行うためにも学生の交流なども促進していく必要があるという結論になり、こちらも手始めにポールスミス奨学金で東京に短期留学中であった学生を12月に関西に招き、京都服飾文

化財団、神戸ファッション美術館、本学を案内した(図2)。今回はスケジュールの都合上、訪れることができなかったが、今後は「播州織」産地の訪問を行っていくことを確認しあった。また、本学からの学生の訪問についても、その方法について検討することを確認しあった。



図1: Amanda 氏



図2: 京都服飾文化財団を訪問中の留学生

##### 6. テキスタイル開発と COE 助成

前述のように、今回はテキスタイル開発に研究を絞ったが、テキスタイルとファッションのシームレスな人材育成という視点において、最終製品であるアパレル商品を踏まえたテキスタイル開発が必要不可欠であり、その点は、ラグジュアリーブランドのアパレル商品向けというターゲットをしっかりと設定することと、2015年度に獲得した兵庫県 COE 助成で購入した TREND UNION 社のトレンドブックの研究により学生への意識付けを行った。2015年度も、希望学生によるプロジェクト形式にて研究を行った。全員に対してラグジュアリービジネスやトレンドについてのレクチャーを行い、共通のテーマ設定などを議論し、個々でのデザイン展開を行った。初めてテキスタイルデザインをする学生への教育的効果を考え、また、獲得した COE 助成が調査ステージであり、2016年度の応用ステージにつなげるためのデータ収集の必要もあり、段階を追った開発を行った。

11月に東京にて行われたプレミアムテキスタ

イルジャパンという合同展に向けたトライアルの制作を行い(図3)、2月にパリにいるテキスタイルコーディネーターへ送り現地のラグジュアリーブランドへプレゼンしていただくためのサンプル制作(図4)、その後のブラッシュアップの計3段階の工程では、デザインや生地仕様については学生がまとめ、テキスタイルにするためのデータづくりに関しては丸萬の上田氏が行った。



図3：11月展風景



図4：2月プレゼン用生地サンプルとブラッシュアップした生地

## 7. 研究の考察

対象となる地場産業が生地の産地ということもあり、連携を密にするためにも、2015年度はテキスタイル開発に焦点を絞った。ファッションという視点は、ラグジュアリーというターゲットの設定及びトレンドの研究という形で学生に浸透を図ったが、最終製品である衣服の制作なしに学生が両方の視点を獲得することの難しさが浮き彫りとなった。また、生地制作においても、11月展のトライアルは、ビジネスとして

の評価は厳しいもののテキスタイルの新たな面の提案という点ではよい評価も受けたが、その発展としてデザイン面とビジネス面のバランスをとる段階では学生の理解が追い付かず、2月のプレゼン用サンプルとその後のブラッシュアップともに良い結果が出たとは言えなかった。今回は、自立したデザイン展開の獲得を目指した教育方法を研究したが、学部生の経験値では、よりきめ細かい教育段階の設定が必要なことを痛感し、教員が主導的に進めるプロジェクトへの参加による経験値の獲得にしっかりと焦点を合わせたほうが、より高い教育成果が上がると結論付けた。また、データづくりを学内で行える体制がなく、デザインを検証するのに必要な実験回数を確保することができなかったことも研究の障害となった。

2015年度の大きな成果は、これまでの本学の「播州織」産地との様々な取り組みを踏まえ、兵庫県 COE 助成の調査ステージを獲得し、連動して本研究を行うことにより、2016年度の応用ステージへの道筋をつけたことであった。調査ステージとの連動ということもあり、研究の運営に実験的な面も多く、課題も多く出てきたが、課題を踏まえ、より教員が主導的に行う形に発展させることにより応用ステージの助成が獲得できたことは、研究の継続発展という面において良い点であった。2016年度助成では、テキスタイル CAD の学内導入の予算も織り込まれており、2015年度の課題であった学内での実験数の少なさに対しても解消が見込まれ、より良い研究体制へと発展させることができた。また、2016年度及び今後の研究の継続発展のためにもグローバルな視点は必要であり、海外他大学との連携の一助として、ノッティンガムトレント大学との交流を進められたこともよい点であった。